様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３４６１

研究課題名（和文）半島マレーシアの狩猟採集民における移動と社会

研究課題名（英文）Mobility and Society in Hunter-Gatherers of Peninsular Malaysia

研究代表者
河合　文（KAWAI, Aya）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教

研究者番号：３０８１８５７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：森林の減少や道路の開通といった環境の変化下で、人びとの暮らしが遊動生活から拠点型移動生活に変化した。男性は遠くまで移動して収入源となる森林産物を獲得し、女性や子どもは拠点に留まる傾向が強まっており、モティリティ（移動可能性）の差異がジェンダー役割に繋がると考察された。さらに、狩猟採集民は広く拡張的に社会関係を築くと議論されてきたが、遊動性と集団メンバーの流動性が低下し特定の人々との関係が強まるなかで、その関係にも変化が生じていることが指摘された。これらは単著、論文（雑誌論文含む）、口頭報告にて発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
モティリティとモビリティを区別し、モティリティの差異とジェンダー役割との関連を指摘した点は、移動技術の発展・普及とともに議論が高まってきた「移動と社会」というテーマに狩猟採集民研究を結び付けただけでなく、定住ではなく遊動生活を送ってきた人々への移動技術の影響という点において意義がある。
またこれまで、広く食物を分かち合い、拡張的に関係を築く平等主義であると論じられてきた狩猟採集民だが、遊動性と集団メンバーの流動性の低下とともに、特定の人々の関係が強化され広く平等な関係が構築されているわけではないことが明らかになり、現在の狩猟採集民の実態を示した点においても意義がある。

研究成果の概要（英文）：Under environmental changes such as deforestation and the opening of roads, people's livelihoods have shifted from a nomadic to a mobile base-based lifestyle, where men tend to travel farther to obtain forest products as a source of income, while women and children are more likely to stay in their bases. Those differences in motility are discussed as leading to gender roles. Furthermore, this study indicated that the relationship between these people has changed as mobility and fluidity of group members have decreased and relationships with specific people have strengthened, in contrast to the previous idea that hunter-gatherers are egalitarian who establish social relationships broadly and expansively by wide sharing practice.

研究分野：文化人類学

キーワード：狩猟採集民　モビリティ　親族・家族　モティリティ　空間

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）半島マレーシアの狩猟採集民バテッは、森林の減少という状況にたいし、現金経済への依存を高めることで対応してきたが、それは道路と乗り物の利用なしには困難であった。車やバイクの利用によって広域での資源獲得が可能になり、その森林資源の取引による収入で食糧を購入し生計をたててきためである。こうした戦略は、家族一緒に川を移動しながらキャンプ生活を送っていた頃とは異なる社会関係の組織化と空間利用によって達成されたと考えられた。

（２）また、技術発展をうけ人の移動性が高まったことで、土地領域を基盤に形成されてきた社会や暮らしに生じる変化への注目が高まっており、オートモビリティの発展が人々の移動を自由にしたようにみえながら、実際には移動を道路をたどる型にはめているという指摘もある（アーリ 2015)。しかし技術の発展が人々の暮らしに影響を与えるという点では共通しながらも、土地に縛られずに暮らしてきた遊動民については、目が向けられずにきており、狩猟採集民研究と近代の移動と社会というように別々に議論されてきた。

２．研究の目的

空間利用と移動の変化に着目してバテッの人々が築く社会関係を明らかにし、環境の変化や道路建設、新たな移動技術の導入による空間再編、という観点から狩猟採集民社会の動態について考察し、

（１）遊動生活を送り平等主義的と語られてきた狩猟採集民像に対し、彼らの新たな移動・輸送技術との関係、現金やモノのやりとりからジェンダー役割等の社会関係を描き出し、近年の移動と社会変動を対象にした研究の流れに結び付けること、

（２）これまで狩猟採集民について議論されてきた定住か遊動かと二項対立的な捉え方を乗り越え、人々の空間利用を総合的に考察、森や道路とともに形成される空間の両方を人々がいかに統合し空間を再編しているかを理解すること、を目的にした。

３．研究の方法

社会関係や経済的相互依存関係について空間や移動という観点から考察するため、

① 個人の日々の空間利用と移動を移動の手段、時、場所、目的といった点に着目して調査し、移動手段へのアクセスやそれを操る能力、場所にかんする知識やナビゲーション能力の有無を明らかにし、

② それらを家族成員の活動や空間利用と組み合わせて分析し、社会役割や相互依存関係を考察する。特に森林産物採集など特定の活動が特定の空間でなされていないか、さらにその空間へのアクセスが特定の人に限定されていないかといった観点から家族成員を比較すると同時に、親族ネットワーク、他居住集団との関係もみていき、どういった場所にいかなるネットワークが形成され、個人の移動を可能としているか考察する。

③ そして移動がなされる環境の成立やその背景については、対象地域における道路建設やプランテーション開発の経緯を明らかにする。特に対象とするのは、村（保留地）の設置が始まった１９７０年代頃からとし、行政やプランテーション企業関係者にもインタビューを行うと同時に、地図や州・連邦政府の政策の分析を進める。それらの結果をもとに、社会制度や国家的経済・社会状況といったものがローカルな環境に与える影響を分析し、最終的には、活動の差異やモノの分配にみられる人間関係、活動にみられる相互依存関係といったものから社会役割や親族ネットワークなどを分析し、移動や空間と関連づけて総合的に考察する。

調査法は、地図や文献資料調査のほか、フィールドワークによる参与観察とインタビュー、GPS（グローバル・ポジショニング・システム）を用いた空間利用調査を用いる予定だったが、実際にはコロナ禍の影響でフィールドワークを十分に行うことができず、上記①～③にかんするコロナ以前のデータを中心に分析した。

４．研究成果

大きく以下４点が成果として挙げられ、学会報告、単著、雑誌論文等として発表した。（しかし、研究期間を１年延長したが新型コロナ感染症の流行をうけて 2020 年度～2022 年度の 3 年間はフィールド調査を実施できなかったため、以下は過去の調査結果に大きく依拠して分析・考察した成果である。）

（１）空間利用と乗り物の変化に伴う社会変化（性差に基づく分業の強化）

川に沿った遊動生活が困難になった現在、人びとは村やその近くを拠点として利用する。女性や子どもはコメなどを消費しながら拠点に留まり、男性は乗り物を利用するなどして広域を移

動し資源を獲得する暮らしに変化しつつある。男女の移動可能性がそれぞれの日常の過ごし方を大きく規定し、資源獲得を担う男性と子育てを担う女性というような性差に基づく分業が強化されつつあり、これらがジェンダー役割となっていくかは今後の状況による。

また、移動可能性が生活と強く結びついている点は、日本などでも「移動格差」として近年盛んに議論されているのと同様である。これについて、2000 年代初頭より人文社会科学分野で使用されるようになったモティリティ（motility、移動可能性）とモビリティ（mobility、移動性）の区別が狩猟採集民社会にも必要である点を指摘し、本の担当章として執筆した。この論点は、近年の移動と社会変動というテーマの研究の流れに狩猟採集民の研究を結び付けるものであり、今後さらなる展開が期待される。

（２）血縁や婚姻集団としての親族についての再考と「つながり（relatedness)」の観点

家族単位で離合集散しながら遊動生活を営むバテッのような狩猟採集民は、血縁や婚姻関係で繋がった人々より成るバンドとよばれる小規模の社会を形成するとされてきたが、実際はこれらの人々は必ずしもそうした関係を辿れるわけではなく、拡張的に親族呼称を用いて関係を築くことも多いことが明らかになった。こうした関係を把握するには、文化人類学等で親族を理解するために近年使用されている「つながり」という観点と解釈学的な理解が妥当だと考え、分析・考察にもちいた。またこの観点から、マレーシア半島部の他の先住民（オラン・アスリ）の親族・家族関係の先行研究も検討した。

（３）かわり方の差異にあらわれる「つながり」の変化

つながりという観点から人々の日常的やり取り、特に狩猟採集民に特徴的とされてきた食物の「分かち合い（sharing)」に着目して社会関係を分析したところ、同じ拠点で暮らす人々とそうでない人々の間でかかわり方が異なることが明らかになった。そして、環境の変化以前、川に沿って遊動生活を営んでいた 1970 年代の先行研究と比較すると、遊動性と集団メンバー（キャンプをともにする人々）の流動性が高かった 1970 年代は、彼らはより多くの多様な人と広く分かち合いをおこなっていたが、拠点を移動先に組み込み、特定のより限定された人々と暮らすようになった現在は、分かち合いの相手も限定されつつあり、拡張的に築かれていた関係が複数の集団に分化する傾向にあると考察された。

（４）「平等主義社会」の変化と「家族」の出現

拡張的に関係を築き広く食物を分かち合う狩猟採集民は、階層性のない平等主義的な社会を形成すると論じられてきた。しかし、（３）のように同じ拠点で暮らすといった特定の人々のあいだで強固な関係がみられるいっぽう、それ以外の人々との関係は希薄化傾向にあり、現在は平等な関係を広く築いているのではないことが明らかになった。特に、夫婦と子どもという「家族」は経済面でも生活面も強く依存しあう関係にあり、それは夫の現金獲得活動と妻の子育て、そして夫の収入によって得られた購入食品への依存の増加という形で相互依存関係が強まっていると考察された。バテッ語には「親子」や「夫婦」を表す語はありながらも「家族」という言葉は存在しなかったが、今後「親子」を表す語が「夫婦と子ども」を意味するようになる可能性があり、広く築かれてきた親族ネットワークもより限定化されていくと考えられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 河合文	４．巻 ８・９
２．論文標題 Malaysia's Original People: Past, Present and Future of the Orang Asli" Kirk Endicott ed.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 マレーシア研究	６．最初と最後の頁 128-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 河合文	４．巻 12
２．論文標題 社会変化下で繋がりを構築する人々：マレーシア半島部オラン・ アスリの事例から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 マレーシア研究	６．最初と最後の頁 129-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　6件／うち国際学会　8件）

１．発表者名 Aya Kawai
２．発表標題 Opening Remarks: Changes in Malaysia and Orang Asli
３．学会等名 Changes in Orang Asli Lives in Malaysia: Engaged Visual Ethnography（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Aya Kawai
２．発表標題 Demographics of the Orang Asli
３．学会等名 Orang Asli Symposium 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Aya Kawai
２．発表標題 A History of Bateq and Malays in the Lebir Watershed
３．学会等名 Roundtable Discussion on Orang Asli Research（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Aya Kawai
２．発表標題 Socialization among the Batek in Kelantan, Malaysia: An Aspect of Spatial Use of the Environment
３．学会等名 Conference on Hunting and Gathering Societies 13（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Aya Kawai
２．発表標題 Potentiality of fieldwork data for rural development in the context of Society 5.0: A case of development planning and the Bateks in Malaysia
３．学会等名 The International Conference on Languages and Communication（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 河合文
２．発表標題 技術革新と人の暮らしの変化：マレーシアの狩猟採集民の事例から
３．学会等名 四大学連合異分野融合研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 河合文
２．発表標題 グローバリゼーションと狩猟採集・交易民バテッ：マレーシアにおける陸路の発展と領域型環境改変
３．学会等名 AA研フォーラム（2021年度第1回、着任記念講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kawai, Aya
２．発表標題 Forest Life and Village Life of the Batek of Kuala Koh: Health and Sanitary Aspect
３．学会等名 Orang Asli Health and Well-being in the 21st Century（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kawai, Aya
２．発表標題 Rivers and Land Routes: Transportation, Economic Networks, and the Bateq
３．学会等名 Anthro Seminar Series, University Sultan Zainal Abidin（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 河合文
２．発表標題 狩猟採集民バテッの社会におけるエイジング：呼称と「老い」にかんする語の使用に着目して
３．学会等名 日本文化人類学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kawai, Aya
２．発表標題 Report on Population Dynamics of the K.Koh Batek
３．学会等名 Panel Discussion, Center for Malaysian Indigenous Studies, University Malaya（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 河合文
２．発表標題 マレーシア半島部における『オラン・アスリ』と政治的主体性：『新しいマレーシア』の理解に向けて
３．学会等名 日本マレーシア学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 河合文
２．発表標題 経済変化と家族・親族関係：マレーシアの狩猟採集民バテッを事例に
３．学会等名 社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓 成果公開シンポジウム
４．発表年 2024年

１．発表者名 河合文
２．発表標題 マレーシアの狩猟採集民の現在
３．学会等名 写真家と考えるマレーシアの狩猟採集民の現在
４．発表年 2024年

〔図書〕　計1件

１．著者名 河合文	４．発行年 2021年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 334
３．書名 川筋の遊動民バテッ：マレー半島の熱帯林を生きる狩猟採集民（生態人類学は挑むMONOGRAPH5）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

COVID-19とフィールド・ワーカー「半島マレーシアの先住民オラン・アスリの村から日本へ」
https://fieldnet-sp.aa-ken.jp/9

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 Changes in Orang Asli Lives in Malaysia: Engaged Vidsal Ethnography	開催年 2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関